

東北大学附属図書館報

木這子



BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ) -

目	次
○連載 和算の電子化(6) : 書誌問題で苦しむ話..... 1	○最近の話題から(その1)「仙台長なすの話」15
○日本における SPARC 活動..... 6	○平成16年度オープンキャンパス報告.....17
○『東北大学附属図書館本館所蔵 新訂貴重図書 目録洋書篇』の刊行について..... 9	○平成16年度東北大学附属図書館企画展 「江戸の数学 - いま, 和算がおもしろい! - 」18
○情報探索マニュアルによるオープンソースの 試み.....12	○第59回東北地区大学図書館協議会総会.....20
○平成16年度大学図書館員長期研修に参加して13	○会 議.....20
○東北地区大学図書館協議会合同研修会に参加 して.....14	○人事異動.....21
	○編集後記.....21

連載 和算の電子化(6) : 書誌問題で苦しむ話

総務課情報企画係長 米 澤 誠

1. 書名をめぐる冒険

ここに、『塵劫記』という一冊の和算書刊本があります。表紙には『絵入塵劫記』と書かれています(これを書誌用語で「外題」といいますが、目録(今でいうところの「目次」)の部分の書名(「目録題」)を見ると『新編塵劫記』となっているではありませんか。さて、どちらの書名を採用したらよいのでしょうか。



図1. 表紙

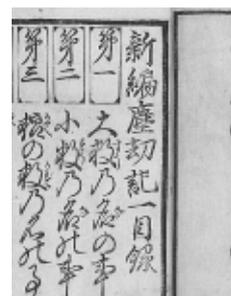


図2. 目録

判断材料を増やすために、もう少し資料の各部分を見てみましょう。序文には『新板塵劫記』、跋文（あと書き）には『新編塵劫記』と記されていることが分りました。

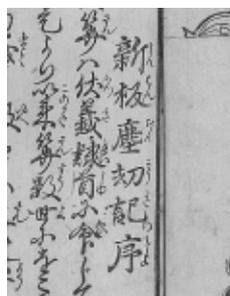


図3．序文

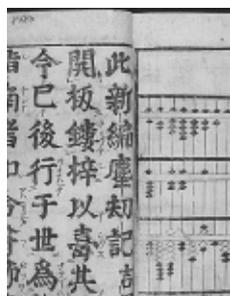


図4．跋文

さらに、^{はんしん}版心と呼ばれる版面の中心部分を見ると、ここには『新板塵劫キ』と記されています。

和古書の場合、表紙というものは後年に作り直されることがあり、必ずしも著者が意図した書名を的確に採用していない場合が多く、信用するに足りません。また序文は、その著作が改版されたときでも、改版以前の序文のままである場合が多く、必ずしも改版の題とは見なせません。跋文にしてもしかりです。版心題にいたっては、スペース上の問題から省略化されることが多いので、これもあまり参考にはなりません。

それに対して、目録題や本文冒頭の題（「内題」）は、本文内容との関係が強いため、改版した場合はその内容が反映したものになっている可能性が高いといえます。以上の理由から、この場合は『新編塵劫記』を書名として採用することとします。

つぎの和算書では、外題と内題と「^{ほうめん}封面」の題とが異なっています。封面とは表紙をめくった時の見返しにあたる部分で、洋書のタイトルページのようにも思えますが、これは信用できるものではありません。えてして和算書では、『何々大全』などと版元が著作内容を誇張するような書名を付する場合があります、これはやはり

内題の『和漢算法』を書名として採用することとします。



図5．外題

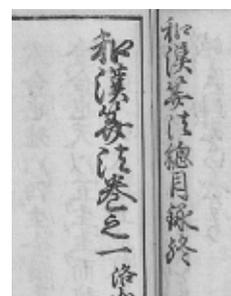


図6．内題



図7．封面題

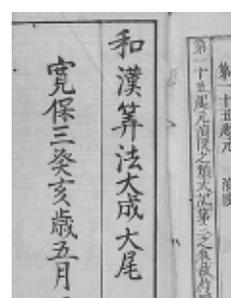


図8．尾題

といってもこれらは一つの原則で、必ずしもこの原則だけでは不都合な場合もでてきます。各部分の書名が異なるときには、他の異版と識別性の高い書名を採用するなどの冒険も有効となります。

実は、現代の図書の目録を作成する際も、同様の問題に遭遇することがあります。標題紙と奥付の書名が異なっている場合など、目録担当者としては本当に困ってしまいます。いつの世も、図書館員泣かせの版元（書店）がいるものなのです。

2．奥付の森

現代の日本で刊行される図書には、必ずといってよいほど奥付が付けられています。私たち図書館員は、奥付の情報を大いに参考にして目録を作成しています。この奥付は、和古書の場合は「^{かんき}刊記」と呼ばれており、現在の奥付はその慣習を受け継いだものといわれています。

さて、和古書に付されている刊記をそのまま信じて目録を作成してよいかというと、そうではないのです。例えば次の和算書には、刊記のごときものが2か所に記されています。

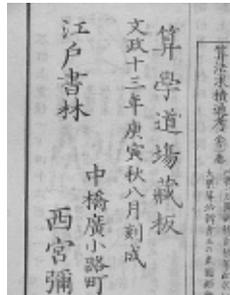


図9．初めの刊記

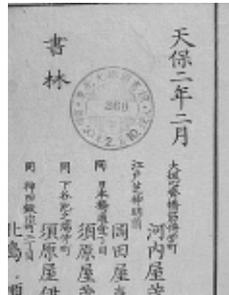


図10．最後の刊記

これは、初めの刊記が初版のもので、最後の刊記は初版の版木を使って「後刷り」したものであることが分ります。この場合は、「文政13年刊・天保2年印」とするのが正しいこととなります。

これに対して、初めの刊記しかない初版本は、「文政13年刊」とすればよいこととなります。初版本と後刷本の違いは、図11と図12を比べてみるとおり、本文の刷りの状態（版木の摩滅度）を見てもある程度区別がつけます。

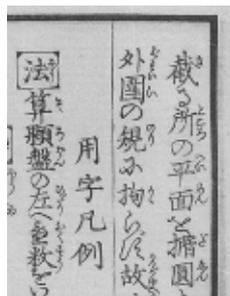


図11．初版本の本文

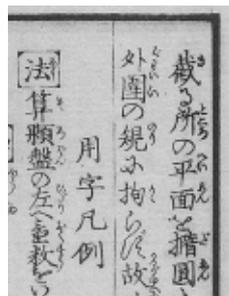


図12．後刷本の本文

江戸時代の刊本は、版画のように版木に本文を彫って印刷しています。よって版木さえあれば、後年いくらでも増刷りできることとなります。しかし、刷を重ねるにつれて版木が磨耗し、文字の輪郭はシャープではなくなってきます。江戸期の刊本は、初版本ほど本文が鮮明で、後刷本になるほど文字の印刷状態が悪くなっていくわけです。書誌的には、初刷の年次を「刊」

で記し、後刷りの年次を「印」で記すことにより、正確にその資料が印刷された年代を示すことができるのです。

以上の例は比較的分りやすいものですが、次の2つの『改算記』は、どのような関係にあると判断したらよいでしょうか。



図13．甲の刊記

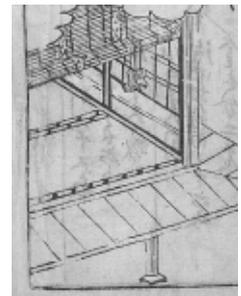


図14．甲の本文



図15．乙の刊記

乙の刊記は、甲の本文を利用した後刷りのように思えます。枠で囲まれている刊記の部分（これを「木記」といいます）だけを版木に新たに差し込む技法は「入木」と呼ばれています。これは後刷りの刊記だけを修正するために使われる技法で、乙はそれを使ったものではないかと思いがちです。

しかし、本文の部分を観察すると、絵柄や文字が異なっていることに気がつきます。これは、甲の版本のページを直接版木に覆せて貼り付け、そのまま上から彫って複製である乙を作る「覆せ彫り」と呼ばれる技法なのです。覆せ彫りによる版面は、多くの場合絵柄の詳細が異なり、磨耗した本文がまた鮮明となる特徴をもちます。よって甲の和算書は「天和3年刊」、乙の和算書は「天和3年刊・後修」と目録に記述

しなければなりません。

このように奥付という森は深く惑わされやすいので、探偵のごとく良く観察して、刊年を推理しなくてはならないのです。

3. 寛永4年の刊行か

さて、刊記が残されている資料については以上のような判断ができますが(いや、実はもっと複雑な事例もあるのですが)、実際は刊記が見当たらない資料(これを「無刊記」といいます)も多々あります。製本のし直しなどにより刊記の部分を散逸してしまった場合もありますが、出版制度の確立していない江戸初期には、そもそも刊記そのものが付与されていない資料が存在します。それらについては、刊年をいつと判断すればよいでしょうか。

この場合は、無理に刊年を推測せずに、序文あるいは跋文に記されている年号だけを記載することとします。図16, 17の『塵劫記』の場合は刊記がありませんので「寛永4年序跋」と目録に記述し、それ以上の推測は行わないようにするのが、書誌学の鉄則です。

刊本の場合、序文あるいは跋文が書かれた(成立した)年次から概ね一年は遅れて刊行されることが多いようです。これは、原稿をもとに版木を作成したり、出版許可の手続をとったりする時間がかかるためと思われる。「寛永4年」の序文が付いた『塵劫記』は、寛永4年に著作として成立していたとしても、恐らくは寛永5年以降に刊行されたものであると推測できるのです。

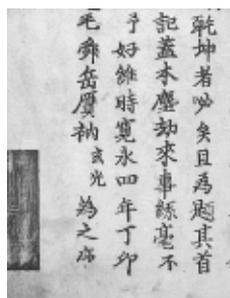


図16. 序文

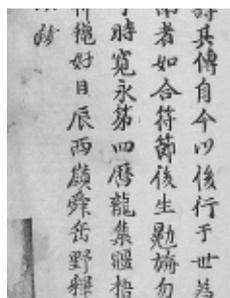


図17. 跋文

ちなみに、序文は本文が完成してから師匠や著名人など目上の者に執筆を依頼するもので、その著作のまさに顔となる部分です。漢文体で格調の高い文章であることが多いですね。また別に、著者本人が自序を付ける場合もあります。

これに対して跋文は、同等か目下の者あるいは著者自身が、著作の成立事情や名著たるゆえんを比較的気軽に書いているもので、ここには貴重な情報が含まれていることが少なくありません。『塵劫記』の序文と跋文をもとに、その海賊版について推理したいきさつについては、本連載の第2回「塵劫記の謎」(本誌 Vol.28, No.4)に記したとおりです。

4. 枠の隅を訊け

次の和算書を見てください。

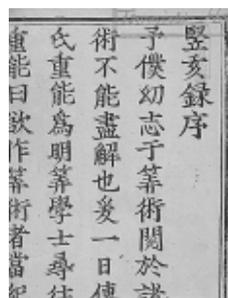


図18. 『塵劫記』本文



図19. 同匡郭

これは、江戸初期の寛永17年に刊行された『^{じゆがいろく}塵劫録』という和算書で、版木による印刷ではなく活字を使った印刷、「古活字版」と呼ばれるものです。

古活字版の特徴は、活字一個一個を組み合わせる版面をつくるために、文字と文字が離れているという特徴があります。これに対して版木の場合は(これを「整版」ともいいます)、連なった文字や、上の字が下の字に入り込んだ本文を表現することができるという特徴があり、これが古活字版と整版とを区別するポイントになっています。この和算書は本文が漢文であるため、もともと字が重なり合うことはないのです。

すが、文字がつながっている「かなまじり文」を表現するために、複数のかな文字をうまく活字化して組んだ古活字版もあります。

古活字版かどうかを識別するもう一つのポイントは、匡郭（きょうかく）と呼ばれる本文の枠の部分です。古活字版では、木枠の中に活字を組み合わせて版面を作成しますが、活字は伸縮するため、寸分たがわずピタリと木枠に収まることはありません。よって、はじめから固定されている枠ではなく、活字を組み合わせてから四方の枠を組み合わせることとなります。この時、最大限枠の四隅が閉じるように努力するのですが、いかんせん伸縮のある活字の組合せですから、どうしても隅には間隙が残ります。これが、古活字版の特徴となっているのです。

さて、この古活字版は大変美しく、貴重なものなのですが、江戸初期以降は廃れて、整版にとって替われることとなります。その第一の理由としては、古活字版は活字を再利用するために、版面を残しておくことができず、商業的な大量印刷に不向きであったことがあげられます。古活字版と整版の長所・短所を整理すると、表1のようになります。

江戸初期以降、出版文化が栄えるにつれて、後刷りも大量印刷もきかない古活字版では、世の中の需要に応えることができなかつたのです。『豎亥録』も、その跋文に「百部だけ印刷した」と記されており、古活字版の宿命でそれ以上の増刷りはできなかつたのでしょう。かくて、唯一現存する本学の『豎亥録』は、非常に貴重な資料となったのです。ちなみに、この古活字版を書写した写本が別に1部、本学に伝わっています。刊本そのものが稀少だった資料は、写本という形で後世に伝えられることになるのです。

表1．古活字版と整版との比較

	古活字版	整版
版面	活字の組合せ。	版木を作成。
長所	活字セットが数組あれば印刷可能。 版面の保存場所が不要。 ・多大の資本は不要。	版面がずっと残るため、後刷りが可能。 ・需要に応じて印刷部数を決定できる。 ・大量印刷に向いている。
短所	次の版面作成のために、刷ったらすぐ活字を戻す必要あり。 ・あらかじめ印刷部数を決定する必要あり。 ・版面が残らないため、後刷りが不可能。 ・大量印刷に不向き。	版木の作成にコストがかかる。 版木の保存に場所が必要。 ・相当の資本投下が必要。

以上、和算書の電子化作業を通じて経験した事例をもとに、和算書の書誌問題の一端を紹介しました。識者の方ならご承知の通り、古典資料の深みと苦しみ、そして愉しみはこれに尽きるものではありません。今回は刊本の諸問題を紹介しましたが、写本をめぐる問題となると、さらに奥深いものがあります。

もし、古典書誌学に興味をお持ちでしたら、本稿を書くのに参考にした、次の書籍をお読みになることを薦めます。類書にくらべて、非常に興味深く楽しく読める内容ですので、初めて書誌学を学ぶには恰好の書であると思います。

- ・ 林望、『書誌学の回廊』、日本経済新聞社、1995年（改題再刊：『リンボウ先生の書物探偵帖』、講談社文庫、2000年）

（よねざわ・まこと）

日本における SPARC 活動

総務課情報企画係長 米 澤 誠

1. 学術雑誌をめぐる世界的潮流

(1) 電子ジャーナル化の進展

科学技術・学術研究の進展のためには、研究成果が学術論文などによって、迅速に広く公平に普及する流通システムが望ましく、研究者・学生が最新の研究成果を常に利用できることが重要です。昨今の欧米学術雑誌の電子ジャーナル化の進展により、私たちの学術研究の形態は急速な変化を遂げており、冊子体の時代に比べ、学術論文へのアクセス環境は格段に進歩しました。

一方、従来から続く商業出版社による学術雑誌の価格高騰の問題は、冊子体から電子ジャーナルへの移行によっても根本的に解決されない問題として残りました。毎年の価格交渉でも、商業出版社の価格吊り上げを阻止することができず、雑誌購読費の増加は大きな問題となっています。当然のことと要求する年5%の価格上昇も、大手のエルゼビア社となると、本学の場合800万円もの支出増加となるのです。企業努力をせず値上げを続ける商業出版社中心の学術流通システムを、このままにしておいてよいのでしょうか？

(2) 学術コミュニケーションの変革としての SPARC 活動

この状況を打破するため、欧米では研究者と図書館が連携した SPARC 活動が発生し、学術コミュニケーション活動を研究者の手に取り戻す試みをはじめています。具体的には、商業出版社の高額雑誌に対抗する雑誌の刊行、オープンアクセスを保障する雑誌の支援、機関レポジトリの普及・促進などを行い、その成果が現われつつあります。

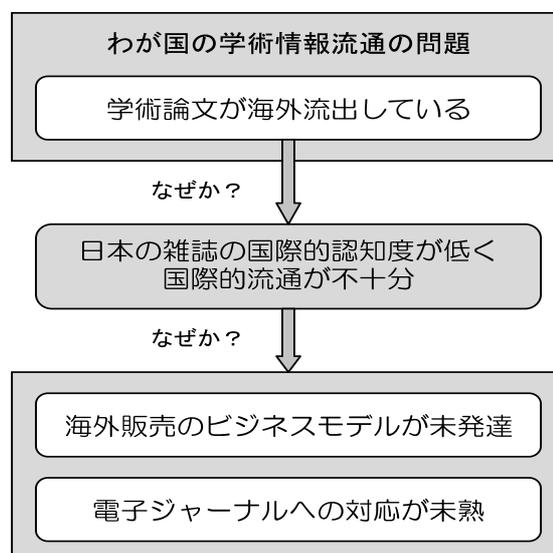
例えば、米国コーネル大学が、2004年度のエルゼビア社の電子ジャーナル購読誌約200誌の削減を、教員と図書館で決断したことなどは、その象徴的な出来事といえるでしょう。(SPARC 活動については、本誌 Vol. 28, No. 4, 2004「学術コミュニケーションの変革としての SPARC 活動」を参照)

2. わが国の学術情報流通の問題と解決策

(1) 日本論文の海外流出

学術分野全体で、日本人が執筆した論文(国際共著を含む)の世界シェアは12%となっています。理工系に限定すると13.3%、生医系だと11.2%と推計されています。一方、それら日本人論文の約80%は海外の学術雑誌に掲載されているという調査結果が出ています。(米国 ISI 社 JCR および NCR による調査推計値による)

このような学術論文の海外流出の状況は、日本の学術雑誌の知名度が低く、国際的流通を果たすことができないことに起因すると考えられています。

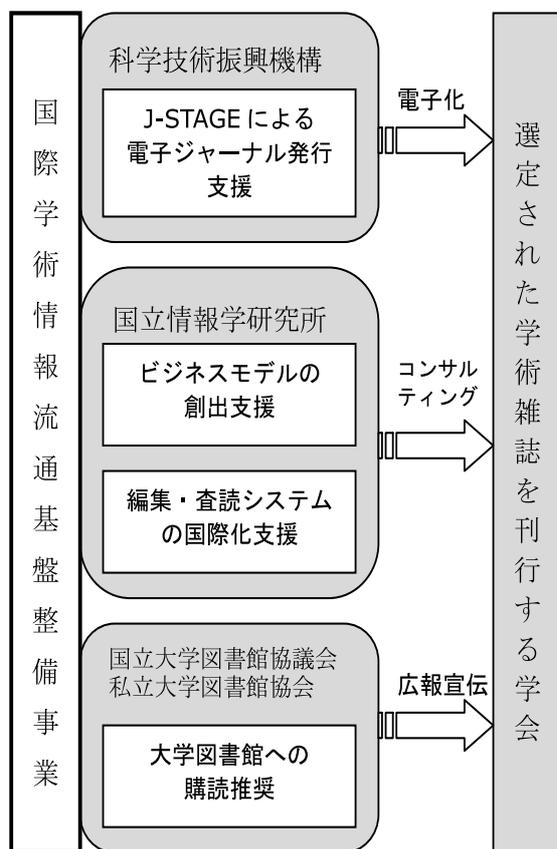


(2) 国際学術情報流通基盤整備事業

海外商業出版社への日本論文の流出を押しとどめ、学術コミュニケーション活動を日本の研究者と日本の学会に取り戻すために、国立情報学研究所(NII)では平成15年度から「国際学術情報流通基盤整備事業(通称「SPARC/JAPAN」)」を開始しました。

この事業では、わが国から海外への研究成果発信の一層の普及を推進するため、ビジネスモデルの創出支援、電子ジャーナル発行支援、学会誌の大学図書館への推奨などの活動を行っています。

関係機関による活動内容



平成15年度は、国内学会刊行の英文誌21タイトル(16学会)を選定し、それぞれの学会の状況に応じた支援活動を続けています。平成15年度選定誌の中で、本学数学専攻が刊行する『東北数学雑誌』については、西川青季教授の「SPARC/JAPAN 採択誌『東北数学雑誌』(本

誌 Vol.29, No. 1, 2004) に詳細が紹介されています。また、社団法人日本金属学会(仙台)が編集する材料系学会の共同刊行英文誌『Materials Transactions』については、平成16年中に電子ジャーナルの全学アクセス購読の提案が示される予定となっています。

平成16年度は、応用物理学会の『Japanese Journal of Applied Physics(JJAP)』誌のサイトライセンス化を実現するなど、各分野における学術雑誌の電子化と販売支援、国際支援を続けるとともに、新規学会の参画を募集しています。また、学会誌の国際的な visibility をあげるために、PubMed や CrossRef, ChemPort といった海外の有力なリファレンスサイトとの相互リンク促進に関するコンサルティングも行っています。

なお同事業では、平成15年度の成果として、『東北数学雑誌』との連携により実現した「数学系ジャーナルへの Project Euclid 紹介」を筆頭に、「生物学パッケージ UniBio Press の誕生」などをあげています。

3. 研究者と図書館の課題

(1) SPARC 選定誌の育成

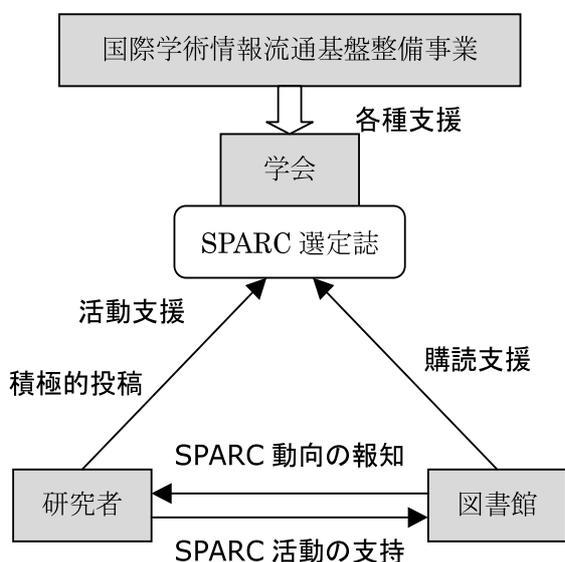
NIIで行う国際学術情報流通基盤整備事業は、主に学会側を支援する活動です。これに対して、学術情報を生産し、利用する私たち大学側としては、どのような活動を行っていけばよいのでしょうか。

まず、学術情報を生産する側の研究者としては、SPARC 活動に関わる学術雑誌に積極的に投稿し、それらの雑誌を刊行する学会の活動を支援していただく必要があります。日本で刊行する雑誌の質を高めるとともに、電子ジャーナル化などにより国際的な accessibility を高めることが必要です。その結果として、インパクトファクターの上昇など国際的な評価につながることを期待されます。

一方、学術情報を利用する側の研究者と図書

館は、両者一体となって商業出版社の価格高騰問題を考え、不当な学術雑誌を排斥して行く努力が必要です。そのためには、大学全体で雑誌価格高騰の問題を認識し、SPARC活動を真剣に考える必要があるのではないのでしょうか。

また、SPARC選定誌を積極的に買いささえる政策をとることも必要です。これまでに記したSPARC活動の意義を鑑み、各大学でのSPARC選定誌の導入を呼びかけるとともに、海外の研究者や図書館への普及を支援していかなければなりません。



(2) 新たな動向

欧米 SPARC では、これまでの活動をフェーズ1 (1998年~2003年) としてとらえ、フェーズ2 (2004年~) の活動としてオープン・アクセス運動を展開しつつあります。これは、学術論文に対する障壁のない (自由な、無料の) オンラインアクセスを目指した運動です。

具体的には、オープン・アクセス誌の創出とセルフ・アーカイビングの普及を行っています。オープン・アクセス誌とは、掲載論文を無償で利用者に公開する電子ジャーナルで、DOAJ (Directory of Open Access Journal) には既に1千誌以上のタイトルが登録されています。

(DOAJ サイト)

URL: <http://www.doaj.org/>

またセルフ・アーカイビングとは、著者がプレプリント (査読前論文) もしくはポストプリント (査読後論文) を個人サーバ、分野別サーバ、大学・図書館サーバに蓄積し、それを無償で公開する活動です。既に欧米では、分野別のeプリント・アーカイブとして、物理学のarXiv.org, 認知科学のCogPrints, 経済学のRePECなどが公開されています。各大学や研究機関別のセルフ・アーカイブとしての機関レポジトリ (Institutional Repository) の取組みも、マサチューセッツ工科大学やカリフォルニア大学などの先進的な機関では積極的に行われています。

セルフ・アーカイビングの動向は、商業出版社の姿勢にも変化をもたらしつつあり、自社の学術雑誌に掲載した論文の、セルフ・アーカイブを認める出版社も現われてきています。

これらの動向については、また稿をあらためて紹介したいと思います。

4. 最後に

日本での SPARC 活動は、まだはじまったばかりです。私たちは、研究者による研究者のための学術コミュニケーションを取り戻すべく、研究者と図書館が一致協力した SPARC 活動の試みを続けたいと思います。ご理解とご支援のほど、よろしくお願いいたします。

なお、本記事を作成するにあたっては「平成16年度 国際学術情報流通基盤整備事業 説明会資料」(NII作成)を、また最近の SPARC 活動の動向については尾城孝一氏 (千葉大学附属図書館) の説明資料を参考にさせていただきました。

(よねざわ・まこと)

『東北大学附属図書館本館所蔵 新訂貴重図書目録洋書篇』の刊行について

情報シナジーセンター学術情報研究部 小 川 知 幸

1 .

東北大学附属図書館本館には数百点にのぼる「洋書」の貴重図書が所蔵されていることをご存じであろうか。

マルクスの自筆書き入れ本に関しては、本学大学院経済学研究科・大村泉氏のご研究によってつとに知られるところであるが、その他にも、およそ15世紀から19世紀にかけて刊行された古典的著作を中心に、プラトン、ライプニッツ、スピノザ、カントなどの哲学書や、註解学派によるローマ法注釈書、またバベジ、チャイルド、ゴドウィン、マカロック、ミル、ペティ、リカードのような経済学史における重要な著作が多数収められている。

とくにアダム・スミスの『諸国民の富』に関しては、初版から第12版までを集めるちょっとしたコレクションの様相を呈している。こうした「古典」以外にも、モンタヌス、フロイス、ケンペル、シーボルト、ペリーなど日本関係の著作の収集や、1987(昭和62)年に購入された、『リヴァイアサン』で知られるホップズの初版本コレクションもある。もっとも古いものは1482年刊行のエウクレイデスの『幾何学原論』であり、これは活版印刷術の揺籃期を知る上での貴重な資料である。

2 .

今回刊行した『新訂貴重図書目録 洋書篇』は、そのうちの220点をセレクトして1冊の目録に収録したものである。本館の洋書に関しては、「あまりに冷遇されている」という認識のもとで、目録の作成や、それにもとづいた保管対策、学術的な公開の必要性が内々に叫ばれ続

けてきた。もともと洋書の貴重図書・資料は、本館が1961(昭和36)年に出版した和漢書関係の『別置本目録増訂稿』のいわば「付録」として100点が公開されていたにすぎず(和漢書は724点が収録)、その後もおよそ40年間にわたってまったく追補の出版がなされなかったのである。

このような現状を憂えた小山貞夫・元館長(西洋法制史)のもとで、1996(平成8)年に「別置本目録増改訂プロジェクト」が発足し、小田忠雄・前館長(代数学)がこれを引き継いだ。私はその3年後に当時の館長直属機関であった調査研究室に赴任し、洋書目録を完成させよとの内命を受けたのであるが、それまでの3年間に準備されていた目録の原稿は残念ながら貴重図書の目録としての水準を満たしていなかったため、これをいったんご破算にして一から採り直すことになった。

その過程で改めて図書館職員のうちの意欲にあふれた若手3名を巻き込み、稀覯書の書誌記述法を勉強させるといふよりは、いっしょに勉強しながら、目録の一部を思い切ってまかせてみた。本書付録となっている「ホップズ・コレクション目録」がそれである。

この試みは大成功で、彼らはめきめきと頭角を現し、ついに立派な目録を完成するにいたった。同時に、この目録部分を監修することで、私自身も、図書館で要求される目録のイメージを知るという意味で裨益するところ大であった。現在その1名は東京大学附属図書館に異動し、残る2名も本館・分館の別々の部署についているが、私は今ではカタログングにおいて彼らを右腕と頼んでいる。

3 .

私も書誌調査のために国内外を駆け回り、ときには専門研究者のアドバイスを受けながら、目録化を進めていった。そうこうして、2001(平成13)年にいったん目録の原稿が完成した。しかしながら、このときプロジェクトの母体であった調査研究室が新設の情報シナジーセンター学術情報研究部に改組されて多少の混乱があった。

むろんプロジェクト自体は、「貴重図書等目録編集プロジェクト」に改称され継続することになったものの、組織改革の大波をまともに喰らい、私の洋書目録ごときは藻屑のように波間を漂うばかりであった。しかし、この時期に目録の全体像をもう一度練り直す機会を得たのは僥倖であった。私は、この目録にさらに、昭和36年から平成8年までに追加された貴重図書・資料をすべて収載することにした。

一方で平成11年にゼッケル文庫を分断して貴重図書指定されたものを外し、これは改めてゼッケル文庫目録としてまとめるということで、現在の目録の原型と呼べるものが出来上がった。また、当初は目録のすべてを欧文で表現することにこだわっていたが、少しでも広い利用者層に受け入れられるようにと、14ページにわたる資料解題を日本語でつけることにした。

追加分を収録したことで、厳密には「洋書」と呼べない特異な資料も目録にくわることになった。土井晩翠宛てのアインシュタイン書簡2通、ニーチェ書簡、フリーエの『産業的共同社会的新世界』のページ間にはさまっていたフリーエ直筆メモなどである。これらの資料がどのようにして本館の所蔵するところになったのかを調べてみると、これが大変おもしろいことに気が付いた。

たとえば、アインシュタイン書簡に関しては、1922(大正11)年に彼が来日した折り、彼を招いた石原純が教鞭を執った東北帝国大学にも立

ち寄り、仙台で一般向け講演を行ったのだが、この講演の後、ホテルに戻ったアインシュタインを、当時第二高等学校教授であった晩翠が追いかけて、葛飾北斎の画集や自作の詩が掲載された新聞記事などを急ぎで手渡した。その後アインシュタインは、帰国の船中からこのときの礼を述べるとともに、詩人に、「(ヨーロッパやアメリカよりも)自分の内なるもののほうがもっと価値があるのだと、日本は知るべきです」などと熱い心情を書き綴った。これがその書簡である。

晩翠の自宅は空襲で焼けてしまったが、彼が家宝としたこの書簡は焼け残り、遺文庫とあわせて、1965(昭和40)年に本館に寄贈されることになった。贈り物を手渡したときの晩翠の満足げな様子を、感心のあまりあんぐりと開けた晩翠の口の中に吸い込まれそうであったと、同行の岡本一平がユーモラスに描写していることを付言しておこう。

4 .

また、ニーチェ書簡も多くの人手に渡りながら数奇な運命を辿り、今は本館に身を寄せている。私がつけた資料解題は、今思えばかなりストックで、あまりに要点だけに絞りすぎた感があるため、いずれ機会があれば、貴重図書・資料にまつわるエピソード、裏話をどこかで発表したいと思っている。しかし何にせよ、すでに資料の存在を明らかにしたのだから、まずはご自身の眼でこれらをとくにご覧いただきたい。資料の利用に関しては、研究上の要件を満たしていれば所定の手続を踏むだけでよいし、定期的開催している展示会などの機会を捉えてご覧いただいてもよいだろう。

話を本題に戻すと、目録の原稿はそうした実質的な増補を経て、2003年に初めて印刷に付された。巻頭の写真も私自身で撮影してコンピュータ処理した。活字や用紙の色、種類、装丁

の様式もこちらで決めさせていただいた。大変な素人作業であるが、端的に言えば単にコストダウンのためであった。とはいえ、私がこの目録のすみずみまで、それこそ余白の幅の一つにいたるまで、自分なりの細心の注意を払うことができたのは、そのお陰である。

年度内の発行を目指したせいで、大学法人化の準備で忙しい中、会計係やその他大勢の方にご無理をお願いしたが、目録の発送もすんでしまった頃には、皆さんに笑顔で刊行を喜んでいただいたことが嬉しい。本目録は、すでに本学の各部局の全講座と、国公立大学、主要私立大学、そして海外の主要大学に発送済みである。この記事を読まれる方は、お手元を捜していただければ、すぐに見つかるであろう。菊判の一冊である。

ただし、本目録が『貴重図書目録洋書篇』を名乗るからといって、本館のすべての洋書貴重図書・資料がここに収録されているとは思わないでほしい。ここから外したゼッケル文庫目録は鋭意準備中であるし、今後の増補もすでに予定済みなのである。

5 .

最後に、心中の余憤を吐露するわけではないが、私には一つ苦い思い出がある。シュヴァルツヴァルトのとある町の図書館を訪れた時のことである。

思ったより古びれた図書館であった。司書の老婦人に、私が日本で貴重図書の整理をしており、比較調査をしているので、ついでに貴館の図書を閲覧させていただきたいと申し出たとき、彼女は露骨に嫌な顔をした。もう、うちに資料はないから、書庫を見たら出ていってくれと言われて案内された書庫には、18世紀以降の図書だけが、うずたかい埃の中に埋もれていたのである。

その後私は本の閲覧も許されず、玄関まで文

字通りつまみ出された。大侯図書館として数多くの貴重資料と手写本を所蔵することで有名であったこの図書館に何があったのか慌てて訊ねると、すべてシュトゥットガルトの大学に売られたという。老婦人は吐き捨てるように、「カネの問題だよ」と言った。

私は、そうではないと思う。そうではない、本を見せなかったからだ。目録もなく、閲覧もできない図書館から本が逃げたのである。本は不当に独占しようとする者の手から擦り抜ける。彼女の手から擦り抜けたのである。

私は図書館の末路を見た気がした。これは私をして何としても洋書目録を刊行しなければと決意させた出来事である。

もとより、本目録は多くの方々の力添えがなければ刊行できなかったことに変わりはない。とくにお名前を挙げることはしないが、ここに記して感謝したい。本目録が今後の研究と図書館の発展のためにいくばくかの貢献ができるならば、私にとってこれ以上の喜びはない。



(おがわ・ともゆき)

情報探索マニュアルによるオープンソースの試み

総務課情報企画係長 米 澤 誠

附属図書館は平成15年度に、学生の学習を支援する教材として『東北大学生のための情報探索の基礎知識2003』（以下『基礎知識』という）を初めて刊行・配布しました。

平成16年度は、これを改訂した「基本編2004」と、あらたに執筆した「自然科学編2004」を刊行しています。研究室や授業で使っていただけるよう、冊子の無料配布について学内各部署に案内したところ、既に多くの教員の方々からお申込をいただいています。

（申込サイト）

<http://www.library.tohoku.ac.jp/mylibrary/tutorial/>

平成15年度以来、学外のさまざまな図書館からも配布の申し出が多いため、他の図書館の方々にも有用なのだと判断し、私たちは『基礎知識』の原稿をオープンソースとして配布することとしました。

オープンソースとは、主にソフトウェアの世界で提唱されているもので、プログラムソースの再配布・改変などを認め、その資源を広く普及させることを目的としています。その代表的なものとしては「GNU General Public License」があり、そこでは次のような原則が主張されています。

- (1) ソースについては著作権を主張する。
- (2) 配布の際、ユーザによる使用・改変・再配布の権利を認める。
- (3) 再配布にあたっては、適切な著作権表示と、無保証であることを明示する。
- (4) 改変した場合は、改変者と日時を明記する
- (5) 改変したものについても同様に、第3者による使用・改変・再配布の権利を認める。

私たちはこれを手本として、『基礎知識』のMS-Word原稿ファイルを、必要とする図書館に配布する試みを開始しました。図書館によっては、同様のマニュアル原稿作成に苦慮しているところが多いと思います。「東北大学」版の記述部分を、自分の大学にあった記述に書き換えるだけで、ある程度利用できるものが作成できるのではないかと期待しています。

当初、東北地区の国公私立大学を中心に、オープンソース利用の案内をしたところ、他の地区も含め9図書館からのお申し出がありました（平成16年9月20日現在）。私たちが努力した成果が、他の大学図書館にも役立つことになることは、学内でご活用いただくのとはまた違った社会貢献の喜びとなっています。

注) オープンソースの利用にあたっては、次のような条件を示しています。

- (1) 本オープンソースの再配布は可能です。ただし、必ず本利用条件を提示してください。
- (2) 本オープンソースを改変して、配布することは可能です。ただし、本オープンソースと同一の利用条件で公開してください。
- (3) 改変に際しては、ソースの提供者（「東北大学附属図書館」）、改変者（機関）と改変年月日を明記してください。
- (4) 改変に際して、画面例の解説内容の追加・変更などが発生した場合、ウェブ画面例の著作権者からの再許諾を得てください。
- (5) 本オープンソースの利用・改変に際しては、利用者の責任において内容についての確認を行ってください。

（よねざわ・まこと）

平成16年度大学図書館員長期研修に参加して

医学分館整理係 今 出 朱 美

平成16年7月5日から7月16日までの2週間、国立オリンピック記念青少年総合センターを会場に、平成16年度大学図書館職員研修が行われた。今年度より3週間から2週間へと期間が短縮され、会場も昨年までは筑波と東京の2カ所であったが、東京1カ所だけとなり、また年齢制限が設けられるなど変更があった。

私自身、図書館に勤務してからこのような長い期間の研修は初めてであった。既に研修を受講された方から色々と参考になるアドバイスをいただき、また、多くの方から励ましをいただき、真夏の東京へと向かった。

研修内容は、講義、討議、見学（国立国会図書館）から成っており、講義の内容は、法人化に伴う行政関係について、大学図書館の管理と運営、電子図書館関係について、学術情報の流通、情報サービスの多様化など多方面にわたり、時代的にもこれから普及するであろうe-bookから当館の狩野文庫の名前も挙がった古典籍まで、図書館関連の多様な話題満載の毎日だった。講師の方々は図書館利用者である大学教官も多く、講義とともに実際どのように図書館を利用しているか伺えたことがよかったと思う。共同討議では、大学図書館運営の在り方を考えるという内容で、最初に各所属図書館の現状について報告があったが、財政的問題、図書館内の統廃合、法人化に伴う諸問題等どこでもいろいろ

な問題を抱え、対応策に苦労しているようであった。特に共通の問題と思われたのは人員削減に関する問題で、図書館界では私が意識していたよりもアウトソーシング化が進んでおり、すべて外注化された図書館も存在する時代、私達は図書館職員として何ができるのかを考えさせられた。一人一人が何か得意な分野を持ち、図書館としてあらゆるジャンルに対応できるように、目的意識を持って仕事をしなければと思った。

2週間の研修期間、本当に有意義な毎日を過ごさせていただいた事を感謝している。私にとって、落ち着いて勉強ができたこと、他大学の状況がわかったこと、そして何よりもこの研修を通じて知り合いができたことが最大の収穫だと思う。今後何か新しいことを立ち上げるとき、何か問題が生じたとき、お互いにアドバイスしあったり意見交換しあったりする環境ができたことは、これからの仕事の上で大きな力をもらえそうで、大変嬉しく思っている。

図書館は常に情報を扱う機関として、常に変化する状況に置かれている中で、目先のことばかりでなく、何十年後もの将来を見据えた活動が大切だと思う。そのためにも、できるだけ多方面のことを考えて行動できるよう努めていきたい。

（いまで・あけみ）

東北地区大学図書館協議会合同研修会に参加して

情報シナジーセンター学術情報支援係 菅 原 透

スクリーンに大きく映し出されるブリトニー・スピアーズ（アメリカのアイドル歌手）。数分間続くダンスと歌のライブ映像。そして、画面が切り替わり表示される全米図書館協会のポスター。そこには「READ」のキャッチコピーと共に、本を抱えたブリトニーが印刷されています。

以上は、研修会で仁上氏が実演した、「早稲田大学理工学図書館“新入生オリエンテーション”」の冒頭です。

平成16年7月30日、「東北地区大学図書館協議会合同研修会」が、岩手大学情報メディアセンター図書館を会場として開催されました。「大学図書館の利用促進にどう取り組むか」をメインテーマに講演と事例発表が行われ、興味深い内容が多々ありましたのでその一端をここにご報告します。

基調講演は早稲田大学所沢図書館の仁上幸治氏。『利用指導サービスと広報戦略 - 専門性を訴求する取り組みのポイント -』が演題です。

はじめに紹介したとおり、前触れもなく突然に行われたオリエンテーションの実演は、冒頭その驚きもさることながら、対話形式でかつ旬の話題を取り入れた構成と、ワクワク感で終わることがポイントだという氏の手法に、広報のイメージ戦略の必要性を再認識させられました。

しかし、多くの館では通常業務に追われていて、長期的視野にたった広報戦略や、学生のニーズに敏感にあわせる広報戦略などは行えていないのが実状かもしれません。これには図書館員が抱える病気と、一般社会における図書館員に対するイメージが相互に影響しているのではないかと仁上氏は述べます。

テレビドラマにおいて、80年代はいしだあゆみの「阿修羅のごとく」。90年代は安田成美の「素顔のままで」。2000年になってからは常磐貴子の「ビューティフルライフ」と、主演者の職業が図書館員であるドラマは数多くありました。しかしドラマでステレオタイプとして描かれる図書館員の社会的なイメージは「親しみにくい、

融通が利かない、理屈っぽい、単純定型作業、職業意識が低い」といったものとのことです。そこには日本社会一般における図書館員への期待の薄さが想い巡らされるばかりで、図書館員自身が想う、専門性のイメージは見られません。

これらの状況を打破するためには、新しい図書館員像が求められていると、仁上氏は言います。それは、従来図書館員が持つべきとされる専門性「書誌知識、主題知識、語学力」のうえに用件追加として、「指導力、企画力、組織力、政治力」を持った職員の必要性です。

そして、戦略としての広報をすすめるためには、図書館員の10大症候群と、図書館組織の病気と呼ばれるもの（興味を持たれた方は仁上氏共著の『図書館広報実践ハンドブック』をご確認ください。）を認識し、克服したうえで、“指導サービスと広報活動”を押し進めることが、要点とのことです。そうすることによって利用者を変えるだけでなく、図書館員を変え、専門性が培われていくことの可能性を、丁寧に紹介していただきました。

基調講演の後、次の3者による事例発表があり、それぞれ活発な質疑応答が行われました。

1)「盛岡大学・盛岡短期大学図書館」関口悦子氏による『文献利用講座の実施』。2)「福島大学附属図書館」南俊二氏による『情報探索基礎講座による利用者教育』。3)「東北大学附属図書館」米沢係長による『職員向け研修と利用指導スタッフの育成』です。実際に各現場で活躍している方の事例を伺うことによって、自館の状況を客観視できたのは貴重な体験でした。そしてこの研修で得た新鮮な感覚を忘れずに、もう一度足元を見つめ直して仕事に取り組みたいと思った次第です。

本研修会は、国立大33人、公立大10人、私立大24人の計67人と、たくさんの大学図書館員が参加しましたが、東北地区の大学図書館全体がこの研修を通してより活性化し、利用促進の契機となれば、と強く感じました。

（すがわら・とおる）

最近の話題から（その1）「仙台長なすの話」

情報サービス課閲覧第二係長 佐藤 初美

「仙台長なす」と言えば、言わずと知れた仙台の特産品です。この特産品と東北大学附属図書館との関係について、ご存知でしょうか。

通常「仙台長なす」は、「長なす漬」などとしてお土産物となり、駅やデパートなどで販売されています。いくつか有名なメーカーがありますが、今回は「岡田食品」の「仙台長なす漬」に注目してみます。仙台在住の方なら一度ならず目にしたことがある、うぐいす色の包装紙に包まれているのですが、これに印刷された文章を読んだことはありますか？ これには以下のように書かれています。

「以廣瀨川以南為佳 其出者早他所 其形質與武州江城 所産異也」

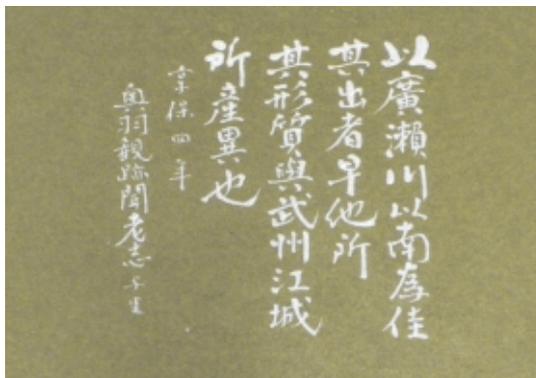


図1.「仙台長なす漬」包装紙

この文章の意味するところは、商品に同梱されているパンフレットにもありますが、「(なすは) 広瀨川下流のものを上質とす」といった内容です。この出典となっている「奥羽観蹟聞老志 享保4年」という資料は、実は当館で「貴重図書」に指定されているものの一つなのです。

「奥羽観蹟聞老志」は、享保4年(1719)に仙台藩の儒学者佐久間洞巖(本名:義和 1653 - 1736)が著した仙台藩の地誌で、四代藩主伊達綱村の命により編纂が開始されたものです。

現代的に言うならば、ガイドブックのようなものと言ってもよいでしょう。これには、当時の仙台を中心とした東北各地の様子や、各産業の発達ぶり、特産物、見どころなどが、当時の認識に従って記述されています。ここまで詳細に記述された資料は非常に貴重で、東北各地の県史、市史などには必ずと言っていいほどこの資料からの引用があり、その地域の特徴(特産品など含む)のルーツを示すための基本文献となっています。



図2.「奥羽観蹟聞老志」

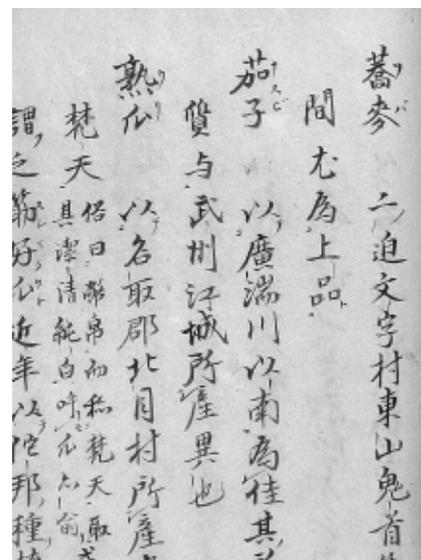


図3.「茄子」の記述部(巻3)

ただし、おもしろいことに調査した事実のみを記述しているわけではなく、何でも網羅的に収録しようとした結果、いわゆる伝承・伝説の類も豊富に含まれているようなのです。有名なところでは、福島県相馬郡にある「新地貝塚」の成り立ちについて「昔鹿狼山（相馬郡にある山）に手の長い神様が住み、その手を海まで伸ばして貝を取って食べ、からを捨てたところが貝塚になった」というように記述してあります。そういうところが逆にこの資料に対する研究者の興味を引くことになっているとも考えられます。

编者である佐久間洞巖は、儒学者であると同時に優れた画家、書家でもあり84歳で亡くなるまで多数の地誌などを著しています。何度か不遇に遭いながらも学問に対しては晩年になってもますます盛んで、新井白石、荻生徂徠などとも交流があったようです。

この資料は、各種展示会などでも登場回数が多く、今年も多賀城市の東北歴史博物館の特別展に出品されました。

「奥羽観蹟聞老志」は、「鈴木省三編、『仙臺叢書』、仙臺叢書刊行會、1922 - 1927」などに収録されています。

どういつながりが、と思われた「仙台長なす」と当図書館ですが、こんなに親密な関係があったとは、長なす好きとしてはうれしい発見でした。きっかけは某テレビ局からの問い合わせだったのですが、貴重資料の特性を知る良い機会となりました。ちなみに、岡田食品の包装紙の文章は当館所蔵の資料からの影印ではなく、宮城県図書館所蔵の資料により調査し、文章は利用しているものの、書自体はまた別な方の手によるものだそうです。



附属図書館情報サービス課閲覧第二係では、本館所蔵の貴重図書をはじめとし全資料の撮影、掲載、展示会出品などの申請・許可手続きを行っています。今後も「これは」と思う話題がありましたら随時紹介していきたいと思えます。

（さとう・はつみ）

平成16年度オープンキャンパス報告

情報サービス課参考調査係

今年度の附属図書館本館のオープンキャンパスには、2日間で約2000名の高校生・一般の方々が訪れました。この人数は昨年約3倍ということで、この数字から年々図書館の展示・企画が皆の心を掴んできていると自負できるのではないのでしょうか。

内容は、館内公開のほか、ライブラリーツアー、貴重書展示会、企画展示会といった、参加者が興味を持ちそうな企画を立てました。

ライブラリーツアーでは、最初に附属図書館紹介のビデオを約20分間上映し、その後参加者を10名～15名程度のグループに分けて、館内を案内しました。行程約1時間、1日4回実施しました。

附属図書館紹介ビデオは、分館を含めた附属図書館全体の紹介をしており、参加者にとっては短時間で図書館の概要や豊富なコレクション等について少しは理解できたのではないかと思います。見学会では、平素、大学院生以上しか入る事ができない、蔵書100万冊を誇る書庫や、平素は未公開の貴重書展示室を中心に案内しました。

このライブラリーツアー参加者は、2日間で477名。ほとんどは高校生でしたが、引率の先生や保護者の方の参加も見受けられました。参加者が特に興味を持ったのは、自動貸出機や電動書架といった図書館の機器類をはじめ、古い所蔵資料群（片平旧図書館時代蔵書、和綴本等の日本古典資料、加えて一大コレクションである狩野文庫等）です。このような古い資料を数多く所蔵しているのみにとどまらず、入庫さえできれば、気軽に過去の文化遺産に触れられることに、「すごい！」と感嘆の声をあげる参加

者もいました。

今年度新たなる企画として実施した貴重書展示会には、当館が誇る夏目漱石の遺品や蔵書を中心に、アインシュタインが土井晩翠に宛てた手紙等も展示しました。こちら也非常に盛況で、この展示を求めて、遠く関東から足を延ばした一般の方もいた程、学外でも評判になっていたことが伺われます。この展示は、2日間で708名の観覧者を記録しました。

さらに今回は、7月に刊行したばかりの当館作成「情報検索の基礎知識 2004」を、オープンキャンパスのパンフレット類と合わせて配布しました。この小冊子は、大学での図書館活用方法が書いてあるに止まらず、読めば広く高度な情報検索が実行できる参考書です。

また、今年度常設展である「田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示コーナー」と「和算資料展示コーナー」にも多くの高校生が興味を示し、展示コーナーの担当者から詳しく話を聞く姿も見られました。取り分け「田中耕一氏対談ビデオ」や「和算体験（実際和算の問題を解いてみる。）」のコーナーには、足をとめる学生が多く、こちらも大成功と言えましょう。

とにかく盛況に終わった今年度のオープンキャンパスでしたが、受入側の感想を述べると、参加者の質問、意見、入場者数の多さから、図書館に対して大きな興味と要求を持っていることも強く感じました。図書館の職員にとっても有益な2日間だったと言えます。

今回、図書館の玄関をくぐった人の中から、多くの図書館愛好家が出ることを願ってやみません。

平成16年度東北大学附属図書館企画展

「江戸の数学 - いま，和算がおもしろい! - 」

平成16年度企画展は、「和算」をテーマとして開催します。和算は江戸時代に花開いた日本独自の数学です。とかく無味乾燥に思われがちで、ともすれば「難しそう」と敬遠されそうな数学ですが、サブタイトルで「おもしろい!」と太鼓判を押しました。江戸時代に和算は、隆盛を極めましたが、現在は廃れてしまったはずなのに、ここ数年各地の博物館、図書館、研究会、学校の授業などで次々に取り上げられ、熱く語られているのは、なぜなのでしょう。

和算をめぐる歴史にはたくさんの謎があります。そのルーツは中国からの伝来と言われていますが、国内でなぜ独自の発展を遂げたのか、遊戯的な方向へ進んだのはなぜなのか、実際の生活にはどのように役立っていたのか、ベストセラーといわれる「塵劫記」は誰がどのように

広めたのか、庶民にとっての和算とはなんだったのか、これらの謎解きを考えながら展示を見るのも楽しいことと思います。

東北大学附属図書館の和算コレクションは総数2万2千冊にもおよび、世界一と言ってもよい大コレクションです。和算研究に必要な資料はほとんどすべてこの中に含まれていると言って過言ではありません。今回の企画展では、この豊富な資料を駆使して、「おもしろい!」のはなぜなのか、なぜ多くの人を引き付けているのかを実感していただけるよう展示および解説を行います。

資料のみでなく、和算をめぐる多くのエピソードや現代での取り上げられ方などについて深く知るため、今回は以下のようなイベントを企画しました。

記念シンポジウム（入場無料）

日時：10月31日（日）10：00～12：00

会場：東北大学経済学部第3講義室（川内キャンパス）

テーマ：「和算と仙台：現代における和算再興の取組み」

基調講演：東北大学名誉教授，土倉保氏

事例報告：宮城県図書館，一関市博物館，東北大学附属図書館，宮城県第一女子高等学校，科学研究費特定領域研究「江戸のモノづくり」研究班

近隣の地域からの興味深い報告が盛りだくさんです！

記念講演会（入場無料）

日時：10月31日（日）14：00～16：30

会場：東北大学経済学部第3講義室（川内キャンパス）

・「江戸の社会に生きた和算家たち」佐藤賢一氏（電気通信大学，助教授）

「日本学士院所蔵和算資料目録」編集，『江戸のモノづくり』研究課題「日本数学史料の所在調査と総合目録作成」研究代表

・「和算と測量：幕末の和算家小野友五郎の生涯」鳴海風氏（作家）

「円周率を計算した男」（第16回歴史文学賞），「算聖伝：関孝和の生涯」，「和算忠臣蔵」，「怒涛逆巻くも：幕末の数学者小野友五郎」

いずれも和算研究の第一人者です。お聞き逃しなく！

図書館員による展示解説

日時：11月6日（土），11月7日（日） 両日とも14：00～ 展示室内にて

初の試みです。

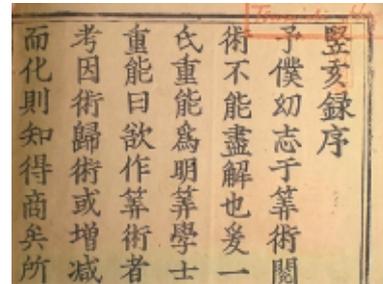
展示構成と主な展示資料は以下のとおりです。

第1部 和算の誕生と発展：「塵劫記」を中心とした、和算発展の謎に迫ります。



⇐ 吉田光由「塵劫記」
寛永8年度

今村知商「豎亥録」⇨



第2部 和算の普及：関流をはじめ、和算に各流派が生まれます。「秘伝」に注目！



⇐ 関流免許状

関孝和

「大成算経」⇨

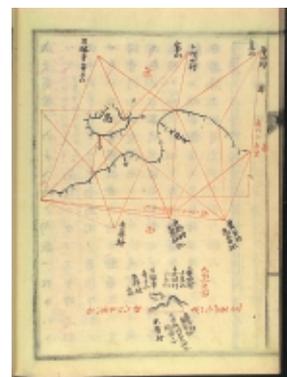


第3部 実学への応用：「測量」を中心に、和算を基礎とした技術を紹介します。



⇐ 小野友五郎校
「量地図説」

伊能忠敬述 ⇨
「量地伝習録」



第4部 東北の和算：山形の「最上流」をはじめ、東北にも多数の和算家が誕生しました。



⇐ 会田安明
「当世塵劫記」

千葉胤秀 ⇨
「算法新書」



第59回東北地区大学図書館協議会総会

表記会議が、9月16日（木）山形大学が当番館となり、ホテルキャッスルを会場として加盟44館から73名の参加を得て開催された。

総会における主な協議事項並びに各部会での協議事項は次のとおりである。

1. 大学図書館の地域貢献・社会貢献の取組みについて

2. 記念事業について
 3. 平成16年度合同研修会について
- 次回総会は、青森大学附属図書館を当番館として開催することが決定されました。

会 議

学 内

16. 7.16 平成16年度第2回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 計画的年次有給休暇に伴う附属図書館の開閉館について
- 2) 学術情報整備計画について
- 3) 学生用図書費等分館配分について
- 4) その他

・報告事項

- 1) 第51回国立大学図書館協会総会について
- 2) 図書館業務職員採用試験について

16. 7.28 平成16年度第1回附属図書館商議会

・協議事項

- 1) 計画的年次有給休暇に伴う附属図書館の開閉館について
- 2) 学術情報整備計画について
- 3) 学生用図書費等分館配分について
- 4) その他

・報告事項

- 1) 附属図書館運営会議について
- 2) 平成16年度第1回学術情報整備検討委員会並びに学術情報資料選定小委員会（合同会議）について
- 3) 平成16年度第1回貴重図書等選定委員会について
- 4) 平成16年度企画展について
- 5) 平成16年度オープンキャンパスについて
- 6) 図書館業務職員採用試験について
- 7) 第51回国立大学図書館協会総会について
- 8) 「東北大学生のための情報探索の基礎知識」の出版について
- 9) 国際学術情報流通基盤整備事業（通称「SPARC/JAPAN」）について
- 10) 各分館からの報告について
- 11) その他
和算資料全文データベースの公開について

人 事 異 動

平成16年9月30日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
16. 7. 31		大 津 亮 子	事務補佐員（情報管理課・図書情報係）	辞 職
"		大 内 淳 子	事務補佐員（情報サービス課・相互利用係）	"
16. 8. 1	薬学部・薬学系研究科用度係	佐 藤 光 信	一般職員（総務課・会計係）	配置換
"	主任（総務課・会計係）	小 野 さち子	工学部・工学研究科化学・バイオ系事務室会計主任	"
16. 8. 31		鈴 木 美紀子	事務補佐員(総務課・情報企画係)	辞 職
16. 9. 1	事務補佐員（情報サービス課・相互利用係）	佐 藤 夏 美		採 用
16. 9. 30		小 野 さち子	主任（総務課・会計係）	辞 職

編 集 後 記

空の高さに秋を感じるようになりました。キャンパスが学生達でにぎわう新学期が待ち遠しい今日この頃です。

今号の木這子では、二人の図書館職員が研修会参加の体験記を寄せています。これらに共通して感じられるのは、アウトソーシング化や財政的困難など、厳しい状況が取り巻くこの図書館界で、いかに図書館員としての存在意義を保つべきなのかを真摯に模索する姿勢ではないで

しょうか。図書館からの積極的な情報発信や、職員それぞれの専門性などの必要性をあらためて強く感じました。

さて、今年もいよいよ企画展がはじまります。テーマは「和算」です。当館所蔵の豊富な資料を駆使し、皆さんに楽しんでいただける内容となっています。多くの方々のご来館をお待ちしています。(O)

東北大学附属図書館報「木這子」 第29巻第2号（通巻107号）発行日 平成16年9月30日

発行人 内藤 英雄 広報委員長 諏訪田 義美

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-217-5911, FAX 022-217-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

